

第七章 動詞の小分

第一節 象形動詞と模型動詞

總説

動詞に動作詞と形容詞との二種あることは前に第三―三頁に説いた通りである。世間では動作詞だけを動詞と稱し形容詞を獨立の品詞としてゐるが、それは不合理である。

私が動詞といふのは動作詞形容詞の二種を合せ稱するのである。その動詞の中普通の人が動詞とも何詞とも判断し兼ねる様な特殊なものが二種ある。私は之を象形動詞、模型動詞と名づけ、普通の人々が直ぐ動詞形容詞と思ふ様なのを記號動詞と名づけようと思ふ。

記號動詞とは聲音を單に概念の約束的記號として用ゐた動詞である。例へば「見る」「歸る」「讀む」「打つ」「長い」「多い」……などの様な、普通、動詞と考へられるやうなものである。「見る」は單に「み」と「る」と二音續いたものを或る概念の記號にしたゞけであつて、聲音と概念との間に何等の自然的關係が無い。約束さへ成立すればどういふ聲音を用ゐても善いので

象形動詞と
模型動詞

動詞の三種

記號動詞

ある。

勿論「見る」といふ動詞の成立するに至つた経路から言へば、聲音と概念との間に自然的關係が有つたのであるが、それは語源の問題である。出來た結果に於ては語源は問題ではなくて、その表示は全く約束的記號に過ぎない。

象形動詞

象形動詞

音畫

象形動詞は聲音が單に概念の記號としてでなく、概念を描いた繪畫として用ゐられるものである。例へば「がたつく」「ぐらつく」などの類である。抽斗があまり緩い場合には出入の際に「がた」といふ様な音がするから「だかつく」といふ。單に「鳴る」「響く」などの記號動詞と違ひ、如何にも「がた」といふ様な音を發しさうな感じがする。この感じが記號動詞と異なる點である。記號動詞であるとするはその語を知らない人には全く意義が分らないが、象形動詞の場合は臆げながら意義のぐはひがわかる。之を喩へて言へば記號動詞は字のやうなもので、字を知らなければ分らないが象形動詞は繪のやうなもので、無學でも、繪だけは多少分る。しかし「がたつく」の「がた」は眞に「がた」といふ音を表すのではない。たゞ

「がた」と云ふ音でも出るやうな氣分を表すだけである。それは「ぐらつく」などの場合に明瞭である。椅子の足がぐらつくといふ場合「ぐら」といふ音は發しない。若し音が有つたらば「ぐら」とでも云ひさうな感じが有るだけである。

されば「ぐら」や「がた」のやうなものを音畫といふ。音で動作のぐはひを描いた畫といふ意である。「ぐら」が眞に「ぐら」といふ音を表すならば吾々は之を音の模型といふ。眞の音を表すのでないから之を象形といふのである。象徴といふ語も有るが、それは意味が少し廣過ぎる。

音畫といふ語は廣義には象形の意にも用ゐられるが、嚴密に言へば音で描いた畫でなければならぬ。然るに象形動詞の中には音でなくその音の表す意義で畫いた畫がある。

花々しい

毒々しい

長々しい

ばか／＼しい

女中々々してゐる

子供々々してゐる

の「／＼」の類がそうだ。これを語畫といふ。凡そ語を二つ重ねるのは單に二つの動作や二つの事物を表すのではなく二つの配合に由つて或るダイメーションを表さうとするもので既に一種の畫である。この意義に於て語畫が成立する。

畫々

又既に畫になつてゐるものを材料にして更に大きい畫を描くことが有る。

がた／＼

ぐら／＼

ばた／＼

のそ／＼

がたびし

ちらほら

ぢたばた

すたこら

「がた」だけで既に音畫であるのに其れを二つ重ね又は音畫「がた」と「くた」とを連ねて更に大きい畫を描く。こゝにいふのを畫々と云ふ。

これはやはり畫であつて畫々ではないと云ふ人もあらう。しかし、「子供」といふ名詞から「子供子供してゐる」などいふ「子供子供」の様な語畫が出来たと云へるならば「がた」といふ音畫から「がたがた」「がたびし」といふ畫々が出来たと云へると思ふ。「がたがた」は「がた」といふ状態の繼續した状態、「がたびし」は「がた」と「びし」とに因つて代表された複雑な状態であつて別のものである。單に二つの状態の枚舉ではない。換言すれば「がたびし」は「びし+がた」ではなく「びし×がた」である。

象形動詞にも活用の有るのと無いのとある。

がたつく

べたつく

ぐにやつく

ぬらつく

べたばる

じやきばる

ぐたばる

のさばる

まめ／＼しい

そら／＼しい

づう／＼しい

さう／＼しい

などは有活用である。

がた

ぐら

ばた

どさ

ばっ

かつ

さっ

ちよっ

青々

黒々

静々

子供子供

轟然

堂々

躊躇

恬淡

などは無活用である。

無活用の象形動詞は活用なしでどうして使ふか。それは断定の動助辭の「〇」と、〇、〇、〇を附けて之に活用を與へる。

1 がたとする

がたんとする

ばつとする

かつとする

2 がたと鳴る

がたんと落ちる

ばつと散る

かつと怒る

の「」の如くに用ゐる。そうすると活の一形容詞となる。その格は(1)の「」は一致格(第四二頁)で下の「」に對して客語(内包的客語)になる。(2)の「」は状態格(第二七頁(三)で下の「」に對して修用語(連用的修飾語)になる。

無活用の象形動詞の中には無活用のまゝで用ゐ得るものもある。例へば

1 がったりする

がた／＼する

ばつばする

かつかする(無など)

青々する

子供々々する

躊躇する

辟易する

2 がったり落ちる

がた／＼揺れる

金をばつば使ふ

火がかつか興る

の「」の類である。その格を一般格といふ。(1)では下の形式動詞に對して補語になり、(2)では下の動詞に對して修用語になつてゐる。

この無活用のまゝで補語や修用語になる用法は和語型のものでは下に「り」の有るもの(例、がちり、のそり、ぐらり)又は二つ重ねたもの(例、ぐら／＼、ばつば、青々)である。漢語型のものでは下に「然」のあるもの(例、卒然、突然)又は二つ重ねたもの(例、堂々、轟々)である。但し「躊躇」「辟易」「枯槁」の様な、本來、動作詞であるものは直接に「する」の上に用ゐられる。

象形動詞は往々副詞と誤られる。しかし副詞には敘述性が無いが象形動詞は敘述性がある。

1 黒々と書く

堂々と乗り込む

唳々と笛を吹く

静々と歩く

2 びつたり合ふ

さら／＼流れる

の「」に敘述性があることは(1)は

墨^{△△}黒々と書く

旗^{△△}鼓堂々と乗り込む

聲^{△△}唳々と笛を吹く

足^{△△}音静々と歩く

の如く「^{△△}」に主語「^{△△}」を冠し得ることでもわかる。主語の無い場合でも、それは主語が無いだけで主體の觀念は有るのである。そうしてその動作狀態を敘述するのであるから動詞である。(2)の例も

二^{△△△△△△}つの間がびつたり。

水^{△△△△△△}の流れがさら／＼。

など云ふ場合が有る。

模型動詞

模型動詞

模型動詞は聲音又は、觀念を材料として或る作用の模型を造り、之を以てその作用の觀念を表すものである。例へば

(1) 雀がちゆう／＼と鳴く。

雞がこけこつこうと歌ふ。

(2) 彼の人知らないと言つた。

私はそうだと答へた。

の(1)の「^{／＼}」は單なる聲音を以て雀、雞の聲の模型を造り、(2)の「^{／＼}」は意義ある聲音(言

語)を以て彼の人、私のその時の言語の模型を造つたものである。(2)の「^{／＼}」も決して私のその時の言語そのものではない。その時の言語そのものは其の時しか言へない。あとから其の通りに言ふのは皆前の言語の眞似(模型)である。

私はだめだと思つた。

彼人は善いと思つたらしい。

の「^{／＼}」は觀念を以て作つた私、彼の人の觀念の模型である。模型の材料は觀念であるが其れは言語に表されてゐる。しかし言語の模型ではない。觀念の模型である。何となれば言つたのではなく思つたのであるからだ。

右の諸例の「^{／＼}」は皆動詞である。材料は聲音又は觀念であるが、その出來た模型は作用の模型である。聲音や觀念は觀方に因つて事物とも觀られるが、模型動詞が之を表す場合は之を作用として表すのである。例へば

1 遙か向うで歌ふ馬子歌に、此方の馬は急に元氣附いて一聲高く「ひいーいん」。

2 此方の馬は急に元氣づいて一聲高く嘶いた。

の(1)の「ひいーいん」が馬の鳴く作用であることは(2)の「嘶いた」と同様である。その相違はたゞ一方は馬鳴そのものゝ模型で、一方は馬鳴の觀念の記號であるだけだ。「ひいーいん

ん」を「ひーいーんと鳴いた」といふべき」と鳴いた」の省略だなどと思ふのは俗解である。「ひーいーん」だけで既に馬の鳴く動作を述べた動詞である。吾々は之を模型動詞といふ。模型動詞には本來活用はない。そのまゝで終止的用法になる。

模型動詞には本來活用はないが、若し活用を要するならば、その場合は動助辭の「〇、と、〇、〇、〇」を附けて活用を附與する。「〇、と、〇、〇、〇」は作用の産果を表す動助辭である。故に一切の語は模型動詞であつてもなくとも「と」を附ければ動作そのものでなく動作の産果を表す語となる。そうして動作の産果は一つの事物としても取扱ひ得るが「と」を附けた場合は一つの狀態(形容)として取扱はれる。故に「……と」は名詞でなく形容詞である。「雀がちゆう／＼と鳴く」に就いて言へば、「ちゆう／＼」は雀の發聲作用とその産果を表し「と」は「ちゆう／＼」が發聲作用の産果としての一つの狀態であることを明確にし「鳴く」は更にその發聲作用を表す。

模型動詞の用法には上述の如く無活用のまゝで用ゐる用法、例へば馬が一聲高くひーいんなどに於ける「ひーいん」などの様なのと、「と」を附けて用ゐる用法、例へば「ひーいんと鳴く」の「ひーいんと」の様なのと二種有る。然るに「と」を附けた模型動詞は生産性作用の産

生産性動詞

作用と産果

果を表すのであるから、生産性動詞といふものゝ説明が必要になつて来る。これは象形動詞に於ても同様である。

生産性動詞 ものゝ作用の中にはその作用の行はれた結果として或る産果を生ずるものがある。例へば「書く」は作用であるが、書けば繪が出来る。繪は書くいふ作用の産果である。

〔作用〕	〔産果〕	〔作用〕	〔産果〕
書く	繪	書く	字
いふ(言ふ意)	語	いふ(名づける意)	名稱
いふ(發音する意)	聲	思ふ	思想
讀む	聲	泣く	聲
歌ふ	歌	聞く	聽覺

こんな風に多くの作用は産果を生ずるが、その作用の概念の中から産果の概念を控除して眞の作用の部分だけを表す動詞がある。それを生産性動詞といふ。

支那人は新高山を指して玉山と曰ふ。

の「曰ふ」は生産性動詞である。「曰ふ」の産果は言語又は名稱であるが、「曰ふ」は唯作用だけを表すのでその作用から生ずる産果(名稱)を表さない。故に「曰ふ」は産果の概念の缺けた半概念であつて、「曰ふ」だけでは全概念としての意義が具備しない。そこでその缺けた概念を補ふために「玉山」といふ客語を取るのである。

國語の「いふ」は種々に用ゐられる語で場合々々に由つて性質が違ふが、漢文では「言ふ」は産果の概念をも含んでゐるから生産性動詞ではない。故に「曰ふ」と區別して「ものいふ」と訓する。「曰ふ」「云ふ」は生産性動詞である。「謂ふ」も主として生産性動詞である。

生産性動詞は、産果に重きを置き、その産果を明示するために他語(客語)をして分業的に之を表さしめる。産果を生ずる作用であつても、その産果に對して注意が浅く、産果を他語に譲るだけの分業が行はれずに、自己の内部に暗に産果の概念を含んでゐるやうな動詞は、生産性動詞ではない。例へば「各その志を言ふ」「人書を読む」の「言ふ」「読む」などがそうだ。言へば言語を生じ、讀めば聲を生じて、「言ふ」「読む」は産果に重きを置かないから産果の如何に拘らず意味が具備してゐる。こういう動詞を非生産性動詞といふ。

眞の生産性動詞といふものは澤山は無い。「曰ふ」「以爲ふ」「爲る」「爲る」などは眞の生産性

「いふ」「言」
「曰」「云」
「謂」

非生産性動
詞

眞の生産性
動詞

動詞だと云へよう。

その他は大抵非生産性動詞である。しか七非生産性動詞でも臨時に生産性を帯びる場合がある。例へば「讀む」は非生産性動詞であるが、

あの人は矛盾を「ほことん」と讀んだ。

の「讀んだ」は生産性を帯びてゐる。何となればこれは

矛盾を 讀んで「ほことん」と曰つた。
實質的意義 △△△△ 形式的意義

の如き意であつて、讀んだの實質的意義の外に「曰つた」といふ形式的意義を含んでゐる。實質的意義だけならば生産性は無いが、その臨時に含んだ「曰つた」といふ形式的意義に生産性がある。そこでその「ほことん」といふ客語も實質的意義に對しては不必要であるが、形式的意義に對して必要なのである。凡ゆる動詞は「いふ」「おもふ」なる「する」等の生産的意義を含ませれば總べて臨時に生産性を帯びる。之を非生産性動詞の生産態といふ。

生産性動詞はその本性から言へば産果の概念が缺けて居るけれども、何等かの事情でその産果が了解されることは有る。例へば「君は行くと云ふが、彼の人は云はない。」の「云はない」は「行くと云はない」の意でその産果が「行く」であることは前からの續きで分る。こういう

生産性動詞
の非生産態

生産の客語

ふのを生産性動詞の非生産態といふ。之に反して上の「云ふ」は生産態である。

生産性動詞及び非生産性動詞の生産態はその缺けた産果の概念を補給するために生産の客語を取る。

生産の客語は即ち「……と」であつてト活の動助辭「〇、と、〇、〇、〇」を附けたもの、第二活段である。

ニ活の「……に」及びト活の「……と」の格は一致格である。しかし「……に」と區別する爲に「……と」を特に生産の一致格といふ。それは或るものと産果との一致を表すからである。

小僧が和尚となる。

では「小僧」が「なる」の産果たる「和尚」と一致する。但し生産の一致格に外延(事物)の一致と内包(動作、形容)の一致との別が有ることはニ活の一致格(第二四頁)と同様である。右の例は小僧と和尚との外延の一致であるが、

鳥が かあ／＼といふ。

私はあの小僧を和尚だと思つた。

などは内包の一致である。「鳥」の内包(聲)が「かあ／＼」と一致し、「小僧」の内包(様子)が「私」の思想に於て「和尚だ」といふ判斷と一致したのである。

「……と」は
形容詞であ
る。

「とて」の音
便

産果を表す「……と」は、名詞ではない。敘述性が有つて動詞(その中の形容詞)である。蓋し産果は必ずしも物ではない。物の内包たる形容も産果たり得る。「和尚となる」の和尚は名詞であつても「と」が附いた「和尚と」は形容詞である。「和尚と」は和尚といふ物ではなく和尚たる状態を表すのである。「……と」が形容性活用であつて形容詞であることは第一九二—二〇〇頁に説いた通りである。

「とへて」が附いた「とて」は口語では殆ど用ゐないが、「とて」の音便「つて」はよく使ふ。

雀は「ちゆうく」つて鳴く。 あの人はいやだ「つて」云つた。

の「つて」は「とて」の音便である。「つてへ」云ふの附いた「つて」云ふは疎略な語では約つて「つてふ」といふ特殊動助辭になる。

四段活 つては つてひ つてふ つてふ つてへ

である。(文語の「てふ」は「といふ」であるから少し違ふ。)

私、善いってはない(善いと云はない)

あの人はいやだつてひます(いやだと云ひます)

富士山つてふ山(富士山といふ山)

いやだつてへば善いになせ云はなかつた(いやだと云へば)

第三四活段の「つてふ」は「ッテ」^ツと發音される。第三活段は殆ど使はないが「まい」「や」「べき」を附けることは出来る。

ト活の「……と」は全部模型動詞なのではない。

種々
「……と」の

1 鳥がかあくと鳴く。

「も」「も」も模型動詞

2 どうも天氣がはつきりしない。

「も」「も」も象形動詞

3 彈丸が雨霞と降る。

「は」は名詞、「は」は名詞性の記號動詞

右の例では模型動詞は(1)の「……」だけである。しかしト活の「……と」は全部產果動詞である。

第二節 形式動詞

總説

名詞に於て「山」「河」の類を本名詞とするが如く、動詞に於ても「行く」「言ふ」「高い」「長い」の類は本動詞である。「此れ」「それ」「彼れ」が代名詞であるが如く、「こんな」「こうだ」「そんな」「そうだ」「あんな」「あつだ」は代動詞である。「孰れ」が未定名詞であるが如く、「どんな」「どうだ」は未定動詞である。そうしてこれらは皆實質的意義を有するものであるから名詞ならば實質名詞で、動詞ならば實質動詞である。

實質動詞

然るに名詞に於ては「者」「咎」「爲」の類、動詞に於ては「爲る」「爲る」「ある」の類は、形式的意義が有るばかりで實質的意義が無い。こういうものを形式名詞、形式動詞といふ。形式動詞に就いて注意すべきことが二つある。

形式動詞

形式動詞は
動助辭では
ない。

形式動詞は
實質動詞で
はない。

その一は形式動詞は詞としての一動詞であつて、動助辭ではないことである。動助辭は單獨性が無く、そのまゝでは一詞を成さないが、形式動詞は自己が一つの動詞である。例へば「私は行きます」の「ます」は、「行き」と合して始めて「行きます」といふ一動詞となるのである。「私は明日、ます」などは云へない。然るに、「研究する」の「する」は形式動詞であつて「研究」と「する」とは離れてゐる。昔は研究もしたが今頃はしないの如く單獨に用ゐ得る。その二は、形式動詞は實質動詞と違つて意義が形式的であることである。唯動作形容の形式的意義を表すだけであつて實質的意義が無い。故に何等かの方法を以てその缺けた實質的意義を補はなければ意義が具備しない。たとへば「私は近頃大に爲ます」など、云つては

第二活段を
補語に取る
もの

右の小さい字は無活用動詞で補語を成し、普通の字は單純形式動詞で形式語になつてゐる。
第二活段を受ける單純形式動詞は、そのまゝ用ゐられることが極めて稀であるが、有ることは有る。

子供が泣き止む

東京に住み慣れる

雨が降り出す

花が咲きそめる

金を使ひ果す

湯が煮え返る

接尾辭

の「」は、最初は上の「」を補語とする形式動詞であつたのであるが、既に「」と「」とが融合して一詞となつてゐる。「」が合體した一詞であるならば「」は一種の特殊助辭(接尾辭)である。然るに文語では古く

分離動詞

住みや慣れけむ

泣きこそやまね

降りぞ出でたる

咲きもそめねば

などの様に「」が「」と離れて一詞たる場合が有つた。この場合には「」は立派に形式動詞である。されば口語でもこういう現象が全然無い譯ではない。

彼奴のことだから其の位の狂言は遣りも兼ねない。

など、どうかすると言はない限りではない。或は又

豫備金を全部を使ひ既に果した以上は……

などいふ様なことは語の抑揚の關係で「△△△」が特に力調を帯びた様な場合には演説などで往々聞くことである。

こういうやうに平素接尾辭たるものが場合に由つて一つの動詞となるのは獨逸文典流に言へば分離動詞である。

修用語を承ける形式動詞

修用語を承
ける形式動
詞

「……て」を受ける形式動詞が有る。

電車で老人に席を譲つてやつた。

の「遣つた」の類である。物を遣る意ならば實質動詞だが、右の例の「やつた」は「譲る」といふ動作が、老人の爲にする動作であるといふ形式的意義を表すのであるから形式動詞である。物を遣るのではなくて席を譲つて之より生ずる好都合(利益)を遣るのである。

「席を譲つて」は修用語である。修用語は世間で連用的修飾語或は副詞的修飾語など稱せら

修用語

一見矛盾

れてゐるが、他語の運用を修飾するものである。客語や補語は他語に缺けた意義を補足するもので意義の具備に必要なものであるが、修用語はたゞ修飾するだけであるから意義の具備に必要なものではない。之を除いても意義の具備を傷けない。例へば「彼の人」は席を譲つて立つた「の」席を譲つて「を除いて」彼の人は立つた」と云つても意義の具備を傷けない。故に前例の「席を譲つても」、形式動詞たる「遣つた」の意義を補足する爲の語（補語）ではない。然らば之を除いて「彼の人は老人に遣つた」と云つて意義が具備するかといふと其れはいけない。「遣つた」は「席を譲つて」に由つて補足される。この一見矛盾と見える現象をどう解釋するか。曰く、それは間接な利益なのである。日清戦争の頃或る軍人が松魚節をボケツトに入れて居つた爲に、敵弾を受けたが松魚節が壊れたゞけで助つた。松魚節は食料であつて敵弾防禦器ではない。「席を譲つて」は修用語（修飾語）であつて、「遣つた」に對する補語ではない。しかし間接な利用に於て「遣つて」は修用語たる「席を譲つて」に因つて意義の缺陷が補はれる。されば、この「遣つた」の様な形式動詞は修用語に由つて間接に補はれる形式動詞として單純形式動詞と區別される。

修用語を承ける形式動詞は澤山有る。次の「　　」はそうだ。

「来る」「よこす」

友人から茶を送つて来た。

茶を送つてよこした。

茶が来た意ではない。茶を送つて其の効果が来たのである。茶を送つてその効果をよこしたのである。

「居る」「ある」

私は今本を讀んで居る。

字が書いてある。

「私が居る」字が有る」ではない。私が本を讀んでその動作か居るのである。字が、人がそれを書いて其の結果があるのである。

「置く」

教へて置く。

捨てゝ置く。

「置く」は豫備又は放任である。

彼の本を讀んで見る。

對手が死んで見れば喧嘩にもならない。

「見る」

「見る」は經驗である。

あの人は死んでしまつた。

まう行つてしまふ。

「しまふ」

「しまふ」はその事が、一寸かりそめでなく、完全に行はれる意である。

教へて上げる（やる）

教へて下さる（呉れる）

「上げる」「下さる」

教へて置く（貰ふ）

感謝の意

恩に答せる

「云ふ」

「上げる」はその動作者は自己であつて他人が利益する意、「下さる」は動作者が他人であつて自己が利益する意、「戴く」は動作者が自己であつて自己が利益する意である故に他人の勞を多しとする感謝の意のある場合にはなるべく「下さる」「戴く」を使ふ方が善い。そうして「上げる」「やる」は恩に着せる意になり易いからむやみに使つてはならない。

あの人は「知らない」つて云つた(おつしやつた、申しました)

「云ふ」「申す」「おつしやる」は模型動詞の方法格「……つて」の下へのみ使ふ。「……つて」は「……とて」の音便で「とて」は「と云ひて」の意である。下へ更に「云ふ」を用ゐても「云ふ」は形式動詞だから差支ない。(漢文の「謂曰」「謂云」の類である。(標準漢文法第二九頁参照) 以上は皆「……て」の下へ用ゐられるものである。

「善い」

斷行して善い(宜しい)。

斷行して構はない。

「宜しい」

斷行したつて善い。

斷行したつて構はない。

「構はない」

明日天氣ならば善い。

明日天氣だと善い。

これは方法格「……て」の下の外、放任格「……だつて」、拘束格「……ば」「……と」の下へも使ふ。

「ならない」
「いけない」
「こまる」

這入つてならない(いけない)處
毎日雨がふつていけない(困る)

行かなければならない(いけない)
雨が降るといけない

「て」と形式
動詞との融
合

これは方法格「……て」の下の外拘束格放任格の下へも使ふ。
「て」と形式動詞との融合 發音上母音又は「し」「ち」に始まる形式動詞は「て」との間に約音略音が起つて二詞が融合して一詞となる場合がある。

書いて行く 書いてく 書いてある 書いたる

書いて御出 書いていといで 書いていらつしやる 書いてらつしやる

書いてゐる 書いてる 書いてをる 書いたる

書いて戴く 書いてたゞく 書いて置く 書いたとぐ

書いて上げる 書いたげる 書いてしまふ 書いたまふ

書いて頂戴 書いたうだい 書くつて云ふ 書くつてふ

母音に始まらない形式動詞でも頭助辭「御」が附くと「お」は母音だから右の原則が適用される。例へば

書いておよこしなすつた 書いてよこしなすつた

書いておやりになる

書いておやりになる

書いておしまひなさる

書いておしまひなさる

の類である。

助動詞

助動詞 西洋文典では形式動詞を助動詞(Auxiliary verb)と稱してゐる。但し英文典などでは助動詞と稱するものには不定法動詞を統率するもの、例へば will, can, do の類と、分詞を統率するもの、例へば have, be の類と二種ある。不定法は即ち體言動詞で、分詞は即ち方法格(用言動詞の一)である。故に英文典の助動詞の二種は我が國語の單純形式動詞と修用語を承ける形式動詞とに當るのである。

西洋の助動詞は助動詞の意であつてやはり動詞である。助辭ではない。故に助辭たる助辭を助動詞と稱することは誤である。助動詞は「May I go?」の may の如きもので本動詞(verb)と融合してゐるのではなく、その中間に他語(上例の I)を置き得るものである。助動辭ならば動詞と融合するから「花や散りぬる」を「散り、花や、ぬる」などとは云へない。助動辭を助動詞と稱したのは英文典の誤解から生じた大槻博士の過失である。故に助動詞といふ名稱を用ゐるならば、その用語を英語科や獨語語で中等高等の各學校で用ゐつゝある

「助動詞」と同義にして形式動詞を指すべきである。助動詞とは日本文典では動助辭を指し英獨文典では形式動詞を指すといふやうなことは斷じて不可である。世間でも全然この論を認めない譯ではない。現時は大分目ざめてゐるのである。たゞ過渡時代として初等文典に於て動助辭を助動詞と稱することも、暫くは大目に視る必要もあるであらう。

連體語を承ける形式動詞

連體語を受
ける形式動
詞

連體語とは他語の意義の體を修飾する語であつて、名詞の連體格(……の)、動詞の連體格(第四活段)及び副體詞の三者である。

形式動詞の中には連體語を承けるのが有る。

保險は附けて置くものだなあ、彼の男は明日にも死ぬといふ身で自分の葬式の費用を心配して居るんだよ。

そんなはかなことが有るもんか、保險でない、平素の心掛だ。

「もん」は「もの」の音便である。「ものだ」は「べきなり」の意。「もんか」は「べけんや」の意である。

友だちは選ぶことだなあ、僕は彼奴の爲にひとひ目に逢はされたよ。

「ことだ」は「べきなり」の意である。

僕は卒業したら自分で商賣を遣るんだ、君は月給取になるのか。

「ん」は「の」の音便、「ん」の「は」其の場合の事情を指す。

伯父さんは中々筆まめだ。丸で御話を伺ふやうだ。

あゝ缺勤続きでは免職になる譯だ。

今日は知事も見える筈ですが、まだ見えません。

私は何處までも此れで押し通すつもりです。

以上の「」は皆形式動詞である。此等の形式動詞に缺けた實質的意義は上の「」なる連語體に由つて補はれてゐる。しかし連語體は元來他語の意義の體を修飾する語であつて他語に對して實質的意義を補ふための語ではない。故に「」は下の形式動詞「」に對する補語ではない。補語でなくて而も補ふ役目をするのは間接な利用である。故に右の例の「」なる形式動詞は連語體に修飾されて之から間接に實質的意義を獲得する形式動詞である。單純形式動詞の様に補語を承けるのとは違ふ。

右の例の様な形式動詞は何故に連語體を承けるか。それは右の例の形式動詞は皆體言から

成立してゐるからである。「もの」「こと」「やう」「わけ」「はず」「つもり」等皆體言である。體言といふのは名詞といふのとは意味が違ふ。名詞でも動詞でも意義が一つの體として取扱はれたものを體言といふのである。「もの」「こと」……等皆名詞としても用ゐられるが、右の例では無活用動詞として用ゐられたものである。動詞として用ゐられても體言には活用はない。時に由つては無活用のまゝで

知らないことは訊くものよ。今日は行かないの。

などの如く用ゐ、時に由つては動助辭「〇、に、〇、〇、〇」なら、なり、なり、な、なれ」「だら、だり、だり、だ、だれ」でせ、でし、です、です、ですれ」を附け活用を附與して用ゐるのである。

これらの形式動詞は體言である。故にその缺けた實質的意義を表すのに連語體を用ゐる。文語の「如し」なども連語體を承ける形式動詞である。

形式名詞との區別 右に擧げた「もの」「こと」「やう」「わけ」「はず」「つもり」は皆無活用形式動詞であるが、これらは用法に由つて形式名詞にもなる。有形物でも無形物でも事物を表すならば敘辭性の有無に拘らず名詞である。事物を表さずに、事物の動作形容を

敘述するならば活用の有無に拘らず動詞である。例へば「水禽の中には美しいのが有る」など「の」は水禽の一部(事物)を指すから名詞である。そういふ用法ならば名詞の格助辭が全部附く。然るに「君は明日内に居るのか居ないのか」などの「の」は君の事情を敘述するものであつて「の」は「のです」の意である。このいふ意味の「の」へは斷定の動助辭や感動助辭は附くが名詞の格助辭は附かない。(第二四頁の形式名詞の條參照)

主語客語を承ける形式動詞

主語客語を
承ける形式
動詞

形式動詞の中には、自己に缺けた實質的意義を、主語や客語に由つて補はれるものがある。

「ある」なる「いふ」等及び同義語「ござる」「致す」「申す」「出来る」なども同様である。

學識が有る

立派な息子が御座います。

善い音がする

變な心持が致しました。

我慢が成らない

辛抱が出来ない

以上の「――」は、主語たる「△△」を承ける。

議論をする

心配をなさる

交際を遊ばす

旅行を致す

以上の「――」は名詞より成る他動格の客語「○○」を承ける。

官吏になる

官吏となる

菓子を供物にする

お禮として菓子を贈る

子の教育は親とある者の義務だ

私としてそんなことは云へません

以上の「――」は、名詞性形容詞よりなる所の一致格の客語「……」に「……と」を承ける。

こうした嘆き

そうした苦み

そうなれば結構だ

どうあるかこうあるか知らない

私は答へてそうだと云つた

天氣がはつきりしない

路がよくなる

道をよくなる

庭が立派になる

庭を立派にする

襟がきちんとする

襟がきちんとする

以上の「――」は、形容詞より成る所の一致格の客語「――」を承ける。

以上に舉げた形式動詞は、一、單純、二、修用語を承けるもの、三、連體語を承けるもの、

四、主語客語を承けるもの、四種(六種の中)であつて、何れも他語の下へ用ゐるものである。然るに次に擧げるものは他語の上へ用ゐられる。

接頭形式動詞

接頭形式動詞

接頭形式動詞は他語の頭へ用ゐるものである。

宅の主人は相も變らず植木いじりばかりして居ります。

人といふものは得て自分の利益ばかり圖りたがるものだ。

まるで打つて變つた態度だ。

昨日例の先生がふらりと遣つて來たよ。

の「」は接頭形式動詞であつて下の「」の意義を修飾する。そうして接頭形式動詞に缺けた實質的意義は却て下の動詞「」に由つて補はれる。文語の例を言へば

得言はず

得も言はず

打ち忘る

打ちも寝なむ

の「」の類である。之を接頭形式動詞と名づけた理由は、こゝにいふものを世間の人が接頭語と稱するから、その接頭の二字を利用したのである。接頭といふことは善いと思ふ。

寄生形式動詞

寄生形式動詞

しかし形式動詞であつて助辭ではないから接頭辭ではない。

寄生形式動詞は何等直接の關係の無い前言に寄生し、前言の意義を自己の實質的意義に利用する形式動詞である。

墮落學生が毎日弄花^{ハナハシ}に耽つて居ると「八八惡イ直グ來イ」といふ電報が來た。何だ、下らない惡戯をしやあがると、平氣で徹宵弄花を續けた。すると翌朝また電報だ、「ハ死亡直グ歸レ」。

この「すると」は寄生形式動詞である。本來實質的意義は缺けてゐるが前言「」を承けてその意義を自己の實質的意義に利用してゐる。即ち「……續けた。すると」は「……續けると」と等しい。「續けると」は實質的形式的の二意義を兼ねてゐるが、その二意義を分解して「續けた(實質的)。」すると(形式的)としたのである。然らば前言「」は「すると」に對する補語かといふと、實質上は補語の代用であるが、形式上は補語ではない。何となれば「續けた」は終止格であつて意義が終止してゐる。「すると」に對して何等の關係を持つてゐない。故に

形式上「——」と「——」とは補語と形式語との関係ではない。無関係である。所が「すると」は内々前言「——」の意義を利用してゐる。前言は「すると」に利用されながら利用されてゐることを知らずにゐる。

この「すると」を「そうすると」の省略と思つてはいけない。「そうすると」と云へば「そう」は一致の客語で「する」はその歸著語である。右の例の「すると」は「そう」などといふ媒介なしに直接に前言を利用するのである。稍古い口語では「して」も用ゐられた。

「若君嘗秀才の御身代り、御役に立てゝ下さつたか、まだか、様子が聞きたい」といふにびつくり、「してして其れは得心か」「得心なりやこそ此の經帷子六字の幡」「ムム、してその許は何人の御内所」と尋ぬる内に……。寺小屋

動助辭から分化して寄生形式動詞となつたものが澤山有る。

この本は大變難しい本だ。

けれども
てすけれども
だけれども
ですが
だが
てはあるが

讀めばわかる。

この本は大變難しい本だ。

だから
てすから
であるから

中々わからない。

の「——」などは皆寄生形式動詞である。

これらを接續詞と思ふのは俗解である。接續するしないは問題ではない。接續してもしなくとも動詞は動詞、副詞は副詞、助辭は助辭である。

甲「あの人も来るだらうなあ。」乙「だらうと思ふなあ。」

の「——」なども寄生形式動詞であるが接續などではない。

單純形式動詞

……(勉強)する

(御歸り)なさる

修用語を承ける形式動詞

……(笑つて)居る

(行つて)しまふ

連體語を承ける形式動詞

……(有る)やうです

(来る)のです

主語客語を承ける形式動詞

……(善い音が)する

(官吏に)なる

接頭形式動詞

……打つて(變る)

得て(そうなり易い)

寄生形式動詞

……すると

だけれども